

大和郡山市

～あふれる夢と希望と誇り 暮らしてみたいくなる やまとこおりやま 元気城下町～

奈良県北部に位置する大和郡山市は鉄道や道路網が整備され、良好な交通アクセスを背景として、県内最大規模の昭和工業団地を中心に企業や工場が集積する製造業が盛んな地域です。

2024 年に市制施行 70 周年とともに市のシンボルである金魚が伝来して 300 年という記念の年を迎え、歴史や文化を伝える郡山城など、まちに対する市民の誇り（シビックプライド）の醸成を目指して、様々なプロジェクト事業の実施や記念イベント等の開催が予定されています。

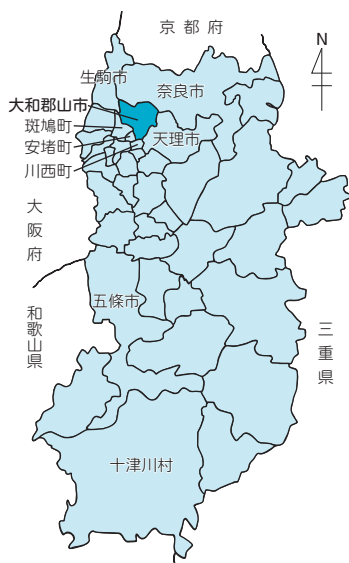
I 概要

1. 地理と歴史

大和郡山市は奈良県北部の大和平野のほぼ中央に位置し、奈良市、天理市、生駒市、生駒郡斑鳩町・安堵町、磯城郡川西町と接する人口 82,926 人、世帯数 39,528 世帯（2024 年 5 月 31 日現在の住民基本台帳）、面積 42.69km²の市である。北西部には生駒山脈の一部を形成する矢田丘陵があり、平坦部には大和川の支流である佐保川や富雄川が流れる水利に恵まれた地域である。

鉄道は JR 関西本線（大和路線）と近鉄橿原線が南北に縦断し、大阪市内まで約 30 分、京都市内まで約 45 分で結んでいる。主要道路は西名阪自動車道、国道 24・25 号線等を基軸に形成され、京奈和自動車道の供用・延伸が進むなど県内の交通の

大和郡山市の位置図



要所となっている。

旧市街地部分は郡山城跡を中心に城下町の趣を残し、郊外は田畑や丘陵地などの自然が豊富にあり、東西には大型商業施設、南部には工業団地を備え、都市空間と自然のバランスの取れた地域である。



豊臣秀長により大規模な城郭が築かれた「郡山城」

城下町としての歴史は戦国時代末期にまでさかのぼる。1580 年に大和国を統一した筒井順慶により、郡山城が築かれた。その後、郡山城主となった豊臣秀吉の弟の秀長が大規模な城郭を築き、大和国の中心都市として繁栄した。江戸時代に入り、譜代大名が歴代藩主を務めた後、1724 年に柳澤吉里が甲府藩から郡山藩に入部し、以後柳澤氏が 6 代にわたり郡山藩主となった。明治維新直後には、6 代目の藩主の保申氏やすのぶが知事として地域の発展に貢献した。

1871 年の廃藩置県で郡山県、小泉県が誕生し、奈良県に編入、1889 年の町村制の実施で郡山町など 8 つの町村が発足した。以後幾度かの合併・編入を経て、1954 年に大和郡山市が誕生した。

2. 産業構造

従業地による就業者人口（15 歳以上）の産業別割合を見ると、第 1 次産業が 2.2%、第 2 次産業が 24.1%、第 3 次産業が 73.7%となっており、奈良県全体（順に 2.4%、22.1%、75.5%）とほぼ同じ割合である（総務省「国勢調査 従業地・

通学地による人口・就業状態等集計」(2020 年))。民営事業所数は、2,955 か所(県内 4 位)で従業者数は 40,758 人(同 3 位)となっている。(総務省・経済産業省「経済センサス活動調査(2021 年)」)。業種別の事業所数では順に卸売・小売業 26.5%、医療・福祉 10.5%、サービス業 10.2%、従業者数は製造業 27.3%、卸売・小売業 19.6%、医療・福祉 14.9%となっている。(総務省・経済産業省「経済センサス活動調査 速報集計」(2021 年))。

同市は良好な交通アクセスを背景に県内最大規模の昭和工業団地と靴メーカーが集積する小泉工業団地を中心に多くの企業や工場が立地する。中でも業務用機械器具・食料品・ゴム製品等の製造業が盛んで、製造業全体の出荷額は県内トップである。(総務省・経済産業省「経済センサス活動調査 製造業・地域別統計データ」(2021 年))。

3. 人口構造

市の総人口は 1995 年の 95,165 人をピークに減少が続いており(総務省・国勢調査)、年齢 3 区分別人口割合では、年少人口(0~14 歳)と生産年齢人口(15 歳~64 歳)は県平均を下回っている一方、老年人口(65 歳以上)は奈良県平均の 32.7%を上回る 34.4%と高齢化が進んでいる。(奈良県「年齢別推計人口」(2023 年 10 月))

II 市制施行 70 周年の節目を迎えて

1. 市制施行 70 周年・金魚伝来 300 年を迎えて

2024 年は大和郡山市が誕生して 70 周年を迎える年であるとともに、市に金魚が伝わって 300 年という記念の年でもある。

「金魚のまち・大和郡山」と呼ばれ、金魚は同市のシンボリックな存在である。柳澤吉里が甲府藩から郡山藩に入部の際、家臣が金魚を鑑賞用に持ち込んだことが始まりとされ、幕末時に武士の副業として奨励されたことで金魚の養殖が盛んになり、現在も国内有数の産地として受け継がれている。

市制施行 70 周年を記念し、ロゴマークとキャッチフレーズを一般公募したところ、全国から 700

点以上の応募があり、将来を担う市立中学校の生徒による最終選考の結果、ロゴマークとキャッチフレーズ「城に桜、街に金魚、平和と歩んだ 70 年」が選定された。



節目の年を迎え、市の魅力・特色を生かしたまちづくりを進めるため、様々なプロジェクト事業や記念イベント等が企画されている。

2001 年 7 月の就任以来、現在 6 期目に入った上田清市長は「次世代を担うこどもたちの心に残る多くのイベントを開催したい」と意気込みを語る。

2. 郡山城跡公園整備事業

郡山城跡公園は、2025 年春の完成を目指し整備が進められている。天守台の堀に面した広大な敷地に遊歩道や植栽が配置され、市民や観光客が園内を快適に散策できる。中央にある郡山城情報館には、郡山城跡の縮小模型や歴史をたどるパネルなどが展示され、休憩スペースとしても利用できる。2022 年に郡山城跡が国指定史跡に指定されたことも追い風となり、同公園は観光振興の目玉としての役割が期待されている。



整備が進められる郡山城跡公園の「郡山城情報館」

3. 大河ドラマ 2026 係の設置

2026 年に NHK の大河ドラマ「豊臣兄弟!」で秀長が主人公として放送されることが決定し、企画政策課内に「大河ドラマ 2026 係」が設置された。

秀長は兄の秀吉を支え、「天下一の補佐役」とも称された人物で、郡山城主の時代に城下町に商人を集め、税を大幅に削減するなどの保護政策により商業振興を図ったほか、「箱本制度」と呼ば

れる自治制度を始めた。この制度に組み入れられた13町は「箱本十三町」と呼ばれ、13町の各々の町が1カ月毎に当番となり、13町全体の治安維持、防火、徴税などの任務にあたった。その際、住民の様々な意見を聞き取り、課題に応じて住民が直接対応するという自治の先駆けとなる画期的な取り組みが行われた。秀長は現在でも「大納言さん」と市民に愛着をもって親しまれている。

大河ドラマをきっかけに同市にゆかりのある秀長にスポットがあたることで、地域の歴史的な魅力の発信など、地域の活性化につながる様々な取り組みを進めている。

Ⅲ 魅力の向上に向けた拠点の整備について

1. 市民の交流拠点「みりお〜の」

将来にわたってまちの魅力を維持・向上させていくため、まちの活力を牽引する拠点の整備が進められている。そのひとつが2022年5月に開庁した市役所新庁舎である。外観は歴史ある城下町の街並みと調和し、内観は金魚をモチーフにした庁舎で、免震構造を採用し非常時には防災拠点として機能する役割も期待されている。



(左) 交流棟「みりお〜の」、(右) 大和郡山市役所新庁舎

新庁舎の開庁に続き、2023年7月に市役所に隣接する交流棟「みりお〜の」が開業した。

「みりお〜の」とは国際補助言語（国際的な意思伝達を目的とした人工言語）として使用されているエスペラント語で「百万」という意味で、秀長が郡山城を居城として大和・紀伊・和泉の100万石を統治していたことに由来する。市民に憩いと交流の場を提供し、地域活動や住民福祉の充実、産業振興につながることを目的に設置された施設

で、親子で集える広場、市内の障がい者福祉作業所の関係者が協力して運営する「福祉ショップ」、蔵書などで金魚を紹介する「金魚文庫」等が設けられ、市民や市外からの来訪者も含めた幅広い交流の場として利用されている。

2. 近鉄郡山駅周辺整備事業

近鉄郡山駅は市の玄関口として郡山城跡などへのアクセスも良く、観光や通勤・通学等の利用者が多いものの、駅周辺は駅とバスロータリーが離れ、まとまった公共空間もなく、歩行者と車両が交錯する状況が生じているなど様々な課題を抱えている。2019年に奈良県と大和郡山市が策定した「近鉄郡山駅周辺地区まちづくり基本計画」を基に、2023年に奈良県と大和郡山市、近畿日本鉄道の三者間で近鉄郡山駅移設に関する基本協定が締結された。より人が集まり、回遊しやすく、歩きやすい駅とするため、現駅舎を北へ約150m移設し、橋上に改札口を設置する駅移設事業と駅前広場や自由通路のほか、駅前公共駐車場など駅周辺施設を整備する一大プロジェクト事業で、2030年度の新駅供用開始を目標に準備が進められている。

上田市長は、まちづくりのコンセプトとして「スマート城下町」を掲げている。駅周辺における「歩行者と車両の通行の分離化」を徹底することで、ゆとりと賑わいを創出し、駅や駅周辺施設を利用するすべての人が使いやすい施設にしたいと考えている。



「近鉄郡山駅」新駅完成予想図

Ⅳ 地域資源を活かした地域活性化について

1. 金魚を活用した地域活性化への取り組み

市の組織「農業水産課」内には、全国的にも珍しい「農業・金魚係」があり、市の重要な産業である農業と金魚の両産業の振興を担っている。

同市は国内有数の金魚の産地として、年間約4,300万匹を出荷する（2022年）。金魚すくい大会など金魚に関連したイベントの開催や観光振興など様々な取り組みを行っている。

1995年から「全国金魚すくい選手権大会」が毎年開催され、各地から金魚すくいの腕自慢が集まり、町全体が活気に包まれるほか、金魚を飼う文化を広く発信する「金魚マイスター」の養成を推し進めている。城下町の町中ではマンホールなど金魚をモチーフにしたものが至るところで見られる。

「金魚が旅した中山道を歩く」プロジェクト“金魚旅”というイベントが2024年秋季に企画されている。大和郡山市の金魚に由来する柳澤吉里の江戸時代の国替に際し、家臣とその家族が甲府から大和郡山市に移住したルートのひとつである甲州街道・中山道の約440キロの金魚伝来の道を市民が中心となり11泊12日のリレーウォークを行うもので、「金魚のまち・大和郡山」を市内外に強く発信し、機運の醸成を図っていく。



「全国金魚すくい選手権大会」の様子

2. 地域の農産物を活用した新たな特産品の開発

同市は農業の新規就農者支援や特産品の開発等にも積極的に取り組んでいる。新規就農者が安心して就農できるよう農地の斡旋や農産物の販売支援を行うことで、毎年多くの新規就農者の誕生につながっている。県が認定する「大和の伝統野菜」のひとつ大和丸ナスの産地として知られるほか、イチゴやトマト、レンコン等の農産物の栽培が盛んな地域である。

奈良県はイチジクの栽培が盛んで、全国第7位の生産量を誇っているが、うち約9割は同市で生産されている。イチジクを活用した「いちじくワ



（左）大和の伝統野菜のひとつ「大和丸ナス」
（右）ワインやソースに加工される「イチジク」

イン」や「いちじくソース」など新たな商品開発に取り組むことで農産物のブランド力の向上や販売促進に向け、積極的な活動が展開されている。

【大和郡山市で栽培されるの主な農産品】

- 大和丸ナス
 - ・奈良県が認定する「大和の伝統野菜」のひとつ。高級食材として利用される
- イチジク
 - ・県内産の約9割が市内で栽培される。ワインやソース等の加工品が商品化されている
- イチゴ
 - ・大正期から栽培が始まり、「古都華」や「あすかるビー」などのブランド品種が生産されている
- トマト
 - ・治道地区を中心に生産され、甘みにほどよい酸味が人気を集める
- レンコン
 - ・土質が柔らかく、地下水が豊富な筒井地区周辺は古くから栽培が盛んな地域である

上田市長は、70周年の向こうにある80周年、90周年さらには100周年を見据え、「まちに対する市民の誇り（シビックプライド）を育み、次世代を担う若い世代の意見や発想を市政に反映させ、地域の活性化につなげていきたい」と語る。

それは都市機能を充実させるとともに、城下町としての風情や歴史文化を観光資源として活用する「バランスあるまちづくり」の実現に向けた取り組みと言える。

さらなる飛躍に向けて、次々と展開されるまちづくりへの新たな取り組みが今後も注目される。

（井上主税、秋山利隆）